

まきどき・植えどき・収穫どき
どきどき情報

4月

野菜の作業

種まき・植え付け	栽培管理のポイント
<p>播種</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホウレンソウ ・コマツナ ・ブロッコリー ・シュンギク ・チンゲンサイ ・ニラ(株分けも) ・サヤエンドウ ・パセリ ・セルリー ・キャベツ、レタス ・ニンジン ・露地用果菜類、シソ等 <p>植え付け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バレイショ ・ウド、ミョウガ 	<p>【アスパラガスのは種】</p> <p>露地アスパラガスは平均気温が 12 を越える頃から、一斉に萌芽伸長し収穫量が増加してきますが、土壌が乾燥状態になってしまうと萌芽性がかなり低下するので定期的に灌水し、適湿度を保っていく必要があります。</p> <p>また、4月下旬～5月の中旬にかけては、は種の適期になります。地床育苗では、水はけの良い場所に 1㎡当たり堆肥 2kg 化成 50g を施し、極浅い溝を切り 3cm 間隔で種を播きます。種は播く前に 30 くらいのお湯に 3 日程度つけてから播き、後はビニールで覆って地温を上げます。</p> <p>15～20 日程度で芽が出ますので、ビニールを取り除き草丈 10cm で、株間 10cm になるよう間引き管理します。</p> <p>【ニンジンのは種】</p> <p>ニンジンは根の短いものほど早生で、は種は 3～7 月まで播けます。ニンジンは肥料やけを起こしやすく酸性に弱いので、肥料は全面に散布しよく耕し、畦の間隔を 80cm 程度で、畦幅 70cm 程度の畦をたて畦たて後 10 日後には種します。</p> <p>は種は畦の中央に 3cm 程度の溝を切り水をくれて土を落ち着かせてからは種し、薄く覆土します。2 条播きの場合、条間 20～35cm 株間 8～15cm で夏場は鎮圧し、切りワラ等をかけ、乾燥させないようにします。間引きは、本葉 2～3 葉ではじめ、草丈 3cm で 7～8cm 同 10cm で 15cm 程度とします。</p>



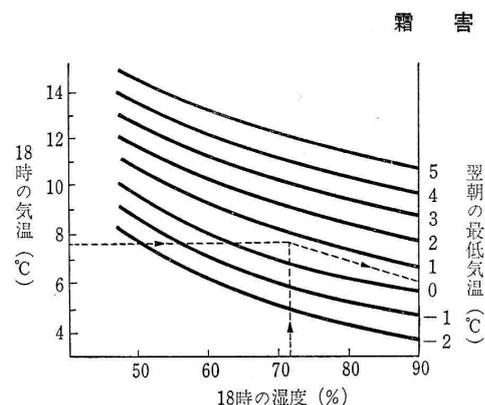
簡単な霜予想の方法と保温資材の利用

「霜予想」

春先は、気象変化が激しく凍霜害を受けやすい季節であることから、テレビ、ラジオなど様々情報手段を活用するとともに、気候の変化の激しい年などは特に注意を払う必要があります。

また、夕方の気温から翌朝の最低気温を予測するという従来から用いられている方法を参考にすることも一つの目安と思われるので紹介します。(右図参照)

それは、18時の気温と湿度を観測し、翌朝の気温を予想するものであり、風、雲の量などで変化するが、10 では湿度が 50%程度で翌朝はほぼ 0 位まで下がるが、湿度が 70%位であると 2 位までで止まる。また、8 では 50%程度の場合、翌朝は -2 程度まで低下し、70%程度でギリギリ 0 位となると推定される。従って、気温 10 程度、湿度 50%程度を下回るような気象状況になった場合は注意が必要であり、気象予報等を特に注意深く聞いていただきたいと思います。



第16図 18時の気温、湿度から翌朝の最低気温を推定する図 (名古屋地方気象台)

「保温資材」

発泡マット(発泡素材)

保温性の高い発泡素材を利用したシートで保温効果が高い資材である。

中空フィルム(ポリエチレンなど)

中空構造を取り入れたフィルムで保温性を高める効果がある資材である。

不織布(ラプシートなど)

耐候性が大幅に改良され保温効果があり、寸法の安定性が良く伸縮しない。

繊維構造タイプなので除湿性・通水性もある。また、耐久性があり数年使用可能な資材である。

(水溜りが出来ず、多湿にならず病気の蔓延を抑え、開閉作業も楽である)



発泡マット



農業豆知識

「新しい品目・作型に挑戦！！」

ニラの栽培（良質なニラ栽培のために）

ニラは、定植後株を養成してから収穫を開始し、数回刈り取って株が消耗すると収穫を休んで株を充実させ、再度収穫するのが一般的です。

作型は、収穫の時期により露地普通栽培と保温（ハウス）栽培があるが、ここでは露地普通栽培を紹介します。収穫は通常一度定植すると2～3年にわたり、夏季に冷涼な地域でより良品生産が期待できます。

栽培では、定植年は株養成にあて2年目から収穫ができ収穫する時期により春刈り（4～6月）、夏刈り（7～8月）、秋刈り（9～10月）に分けられます。春刈りが最も品質よく収量も望め、夏刈りは抽だいにより収量・品質が低下する。

秋刈りでは生育が回復し収量も増すが養分貯蔵の時期であり、春ほど収量は望めない。

品種的には、大葉品種群に属するグリーンベルトやスーパーグリーンベルトの2品種がほとんどであり、小葉品種群（在来種）は、耐暑性・耐寒性が強く、分げつも旺盛で栽培しやすいが市場性が劣ります。

は種は、6月下旬～7月上旬に定植を終えて株の充実を図るため、3月下旬～4月上旬のハウス育苗が望ましく、播き幅10cm、深さ1cm程度の溝を切り種子を1cm間隔に条播し、敷きわらとかん水をします。

定植は、畦幅40～50cm、株間20～25cmの単条、あるいは2～4条のベット栽培とします。

苗は、草丈20cm程度の苗を3～4本のまとめて植え、倒伏や過剰分げつを抑えるため深さ10～15cmの深植えとするが、活着促進のため覆土は厚くせず、活着後土寄せを8月下旬まで2～3回に分けて行い、最終的には畝が平らかやや高くなる程度にします。株養成中は施肥、中耕・除草・花茎刈り、防除などの管理を徹底し、2年目以降もこれに準じて株養成を行います。抽だいは、1年目は少ないが2年目には一斉に発生してくるので放置せず早めに刈り取ります。収穫は、通常4～5回程度行う回数が増すに従い葉幅が狭くなるなど品質が低下するとともに、分げつが進み密植により収量も低下するので3年程度を目安に計画的な更新を行い、葉幅のある品質の良いニラ栽培に努めることが大切です。



基礎コーナー（初心者コーナー）

～農薬の安全な使用方法とは？～

1 病害虫の発生と確認

一概に農薬といっても大別して、予防薬と治療薬があり、予防薬は病害虫を侵入しにくくする効果があり、発生時期前に散布すると効果的です。一方、治療薬は病害虫が発生した時に直接菌や害虫に効果があるものですので、病害虫の発生予察情報の活用や病害虫の発生状況を十分把握して使用することにより、より効果の高い防除が可能となります。

2 農薬の使用法の注意点（生産物の安全性の観点から）

農薬は、それぞれに使用できる作物や濃度、時期、回数などが「農薬取締法」などにより規定されていますので、農薬の袋やビンに書かれている使用方法を十分理解し安全に使用してください。

(1) 農薬の適用作物

農薬は作物ごとに、効果試験や残留試験等を行い使用できる作物が登録されていることから登録の無い作物には使用できません。

(2) 農薬の使用濃度（量）

農薬は、作物ごとに使用濃度が規定されていますが、例えば1,000倍～2,000倍という場合には、薬害を起こさない倍率として1,000倍が、効果が期待できる倍率として2,000倍という範囲が設定されていますので、基準の範囲で使用しましょう。

(3) 農薬の使用時期（期日）

使用時期は、「収穫 日前まで」と規定されている場合が多く、これを守らないと基準値以下に残留濃度が下がらないなどから基準オーバーとなる危険性が高まるので、超えた使用はできません。

(4) 農薬の使用回数

使用回数は、「1回又は 回以内」と規定されており、散布を重ねる都度、前回の農薬の残留している農薬に上乘せとなり、規定回数を超えて散布した場合、上記同様残留濃度が基準値をオーバーする危険性が高まることから超えた使用はできません。